

協働的に学ぶよさの科学的根拠

コミュニケーション能力の醸成

2019.04.16

No.65

校長 渡邊 幸二

日本経済団体連合会のホームページに、「2018年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」というページがあります。そこには、企業がどんなことに着目して学生等を採用したかが示されていました。

選考にあたって特に重視した点

今、学校で当たり前のように大事にして指導している「学力」は、どれくらい重視されていると思いますか？
驚きの結果でした。

18位。たったの4.4%しか注目していないという結果でした。

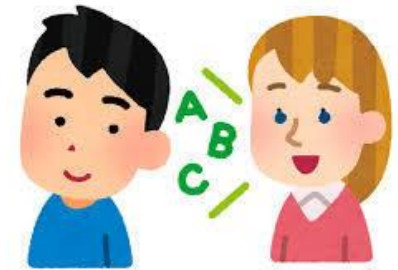
では、来年度から本格実施される英語…「語学力」はどうでしょう？

これもまた驚きの17位。たったの6.2%でした。

では、企業の面接官、あるいは企業は、学生たちのどんなところを見て採用していたのか…つまり、**就職後に最も必要だと思われる能力**と言ってもいいと思います。いったい何でしょう。

第1位は「コミュニケーション能力」で、82.4%で、2位に「主体性」の64.3%が続きます。

余談ですが、山形県の教員採用試験が今年度から変わるそうですが、どうもまだそうはなっていない、相変わらず「学力」や「一般常識(16位6.5%)」にスタンスを置いているように思うのです。これでは、しっかりと子どもと向き合える、あるいは対話が可能な人材が集まらないのではないかと思います。今年度末で学校というところから身を引く者にとっては、とても心配でなりません。



コミュニケーション能力の醸成

さて、この「コミュニケーション能力」を本校なりに言い換えれば「きく」であり、「反応する」だと思います。ですから、協働的・互恵的に学ぶことができる子どもに育てることは、未来を切り拓く子どもを育成することに直結しているのだと思います。

加齢医学研究所の瀧靖之教授によれば、コミュニケーション能力などの社会性が大人と同じくらいまで成長するのは、10歳以降の思春期なんだそうです。この時期に、脳の中でもコミュニケーションを司る部分が発達するのということでした。(加齢医学研究所は、あの川島隆太氏が所長を務める研究所です。)

ということは、もし、学校が相変わらず教師との一対一、一対多の「一斉授業」ばかりして、子どもたちとのコミュニケーションを促進しないままでいたならば、子どもの本来発達すべき脳があまり使われないまま過ぎてしまうということになりかねません。ましてや、子どもたちが何人か集まっても、ただ個人的にゲームを興じるような過ごし方(ネット上では繋がっていると言い張るが…)は、人間的な成長を阻害していると言わざるを得ません。

逆に、われわれが今行っている「きく」「反応する」「対話」がたっぷりと盛り込まれた授業は、子どもたちが今まさに伸びようとしている適期に、太陽と栄養と豊かな水を与えているようなものだと思います。別に授業だけでなくっていいんです。休み時間に一緒に遊ぶことだってコミュニケーション能力を培う大事なレッスンだと瀧氏は言っています。縦割りの仲良し清掃も、誘い合い登校も、子どもたちから見れば大事なコミュニケーション能力獲得の学びの場なんだと思います。



最近、よく「目的」と「手段」を入れ違えるなど言われます。仲良し清掃は、学校をきれいにすることも一つの目的ですが、「教育」ということから考えれば、「他者意識を醸成できているか」「コミュニケーションが図られているか」などが大事な評価の指標なのかもしれません。誘い合い登校も、安全に登校することはもちろん重要課題ですが、それは営みの結果であって、目的は「リーダーシップ(フォロアーシップ)」の育成だったり、「思いやり」・「自己管理能力」の育成なのかもしれません。

ここまで突き詰めて考えてくると、学校の通知表に「学力」以外の評価項目がもっとあっていいのではないかと思うのです。浜田小学校であれば、たとえば「きく」がどれほどできているのか。「反応する」ことに関して、我が子はどれほどできるようになってきたのかなど、子どもの成長・未来をまじめに考えている親であれば気になる場所ではないでしょうか。

